

# 新副会頭に聞く“VIVID KYOTO”

第1回 村田 恒夫 副会頭 (株)村田製作所 代表取締役会長

塚本体制を支える新副会頭へのインタビュー企画。第1回は、昨年11月に就任された村田副会頭に、京都経済の現状やwithコロナ時代の企業経営、また環境やエネルギー、ライフサイエンスなどの課題について、語っていただきました。

## withコロナ時代に 即応した支援で ピンチを好機へと転換

昨年11月、副会頭職を拝命しました。これまで電機・機械金属部会長の経験はありましたが、これからは限られた分野だけでなく、塚本会頭による新たな体制のもと、京都経済の隅々にまで目を配り、中小企業の活性化や産業振興に一層取り組んでいかなければならないと考えています。

特に、新型コロナウイルス感染症の拡大は、京都経済に大きな影を落としています。観光分野で言えば、需要が蒸発するという表現がありますが、まさにインバウンド需要が消えてなくなり、海外から日本へ来られるお客様は99・9%減という大変な状況になりました。伝統産業の分野においても、従来の後継者不足の問題に加え、要だった工房見学や体験教室が開催できないなど厳しい状況が続いています。従業員の安全・安心を第一とした働き方改革に取り組むとともに、withコロナ時代にふさわしい商

品・サービス、企業や店の在り方はどうなるものか。京都商工会議所を中心に、オール京都の知恵を振り絞って、ピンチを好機へと転換していく支援を提供していきたいと思っています。

## 大学の研究シーズを結びつけ 新たな技術創出の アクセラレーターに

これからの社会では、京都独自の地域性、あるいは企業文化を積極的に活用していく必要があるとす。京都には非常に限られた分野を深掘りし、新たな技術や産業の創出につなげている企業が数多く存在しますが、そのアクセラーターの一つとなるのが産学連携の取り組みではないでしょうか。

当社でも町工場の時代から京都大学等の支援を受けながら、京都で培った伝統技術をグローバルな最先端技術へと昇華させてきました。現在も様々な大学と共同研究を行い、新技術の開発に生かしています。中小企業にとって大学はハードルが高い存在かもしれませんが、今す

ぐ実用化できなくても、磨けば光るシーズがたくさん埋もれています。今後は、大学のシーズを掘り起こして翻訳し、企業のニーズに結びつけるような橋渡しも大切ではないでしょうか。

## 環境に対する意識を変容し 京都発の ビジネスモデルを発信

私は副会頭として、「環境・エネルギー」と「新産業創造」分野を担当しています。一口にゼロエミッションと言っても、ものづくりをしている中小企業にとって、温暖化ガスや産業廃棄物等の排出量を抑えることは容易ではありません。しかし、SDGsへの取り組みやESGの評価が企業価値に結びつき、また日本と関係が深い中国市場においても厳しい環境基準が設けられている今、京都の企業がグローバル化を目指して成長・発展していくためには避けて通れない取り組みとなっています。

例えば、環境・エネルギーの分野で様々な技術を持った企業が連

「オール京都の知恵を振り絞って、  
ピンチを好機へと転換していく支援を提供していきたいと思っています」



携することで、再生可能なエネルギーの使用比率を高めていくような京都モデルが生み出せないでしょうか。環境問題は努力義務という意識を変え、むしろ新たなビジネスチャンスへと変えていける先進事例を一つでも二つでも増やしていきたいと考えています。

## ライフサイエンス技術を 集積し

### 次世代の医療を拓く イノベーション

新産業創造の中でも、特にライフサイエンスの分野については、京都大学を始めとする再生医療の先端拠点や分析機器・バイオ系の企業など、京都には大きなポテンシャルが蓄積されています。

ライフサイエンスに関する商品や技術はプロダクト・ライアビリティ（製造物責任）の観点から、日本の企業はこれまで開発にあまり力を入れてきませんでした。しかし、Withコロナ時代において医療の在り方が見直される中、例えば家

にしながら毎日の血圧や心拍数、体温等を遠隔管理したり、電子カルテで患者情報を共有したりするなど、ライフサイエンス技術だけでなく、通信やセンサなど様々な周辺技術を融合することで、次世代の医療を支えるイノベーションの種を京都から育てていくことが期待されています。

## 創発意欲を刺激する

### 仕掛けづくりで

### 若手起業家の

### スタートアップを支援

京都商工会議所の新たなビジョンでは、若手起業家のスタートアップ支援を重要項目として掲げています。社会の在りようが変わるときだからこそ、私たちが思いもよらない発想や技術に目を向け、この難局を乗り切るヒントにしていく必要があります。当社では、業務時間の2割を新たなアイデアを創出する時間に使っているという「創発活動」を推進していますが、これからは若い人たちに手を挙げてもらいや



すいような仕掛けを提供していくことが大切ではないでしょうか。

京都には、京都商工会議所を始めとする様々な支援機関、試作をサポートしてくれるネットワーク、またファンドやベンチャーキャピタルなど、起業のためのアクティビティが揃っています。単に資金調達だけでなく、例えばインキュベーターが起業家に寄り添って各ステージに応じた支援メニューを提供していく、あるいは起業経験者が教育現場に立つて学生や生徒のベンチャー意欲を刺激していくなど、様々なアプローチから用意されたアクティビティがうまくつながればいいですね。

社業のほうでは今年6月、兼務し

ていた社長職を後進に譲って会長職のみとなりました。趣味である蘭の栽培や写真の世界に没頭できるかと思えばそうではなく、これまでの業務執行責任者から離れた立場で、コーポレートガバナンス強化に努めながら、現場の視察活動や人材育成などに忙しく走り回っています。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、私たちの行動や意識は大きな変容を強いられました。改めて京都経済・産業を俯瞰できるようになった今、塚本新体制のもと副会頭としての職責を果たし、会員の皆さんの協力を得ながら京都のまちの発展に力を尽くしていきたいと考えています。